

高知県立大学の学長が2023年度、野嶋佐由美氏(72)から、労働安全衛生総合研究所(東京都)の所長代理だった甲田茂樹氏(65)に交代した。2期6年務めた野嶋氏は「地域に根差した大学として、伝統をつないできた。甲田氏は「県立大学として、より存在感のある大学にする」と意気込みを語った。(聞き手＝加治屋隆文)

県大新旧学長に聞く



高知県立大学の学長室で握手する甲田茂樹新学長(左)と野嶋佐由美前学長(高知市池)

野嶋前学長「伝統つないできた」

最後の3年は新型コロナ禍だった。20年4月当初は授業ができなかつたが、教職員がチームを組み、同月20日には遠隔授業を始めることができた。学生も含めて一体で乗り越えた。看護学部を中心に、コロナ患者のサポートや自宅療養者の電話相談など社会貢献もできた。感慨深いものがある。

「地域に根差した大学として、看護や社会福祉など全4学部で実習を大事にしてきた。学生は問題解決に向けて疑問を持ち、探究している。高知女子大学の伝統、平和への思いをつなぎ、新しいものを取り入れながら進んでいる」

「大学図書館の蔵書の焼却処分問題が起きた。県民に申し訳ない。その言葉に

た。

「再活用の方法を十分に模索せず、配慮が足りていなかった。その後、図書館の管理運営体制を強化。不十分だった学内規定も改正して、毎年見直すようにした」

「自身の今後は？」

「本学の特任教授として研究を続ける。家族看護学という言葉で言い始めたのは多分、私だと思う。病人を抱えた家族をどうやって支援できるか、これからも考えていく」

甲田新学長「存在感ある大学に」

1994〜2005年度、高知医科大学(現高知大学医学部)にいた。高知は、その時が2回目。岡山

防毒マスク着用の指導をした。00年に高知市八反町の県営住宅建設用地でダイオキシンの確認された時も、県に引っぱり出された。

「学長を打診された。長く大学の現場から離れており、荷が重すぎると思ったが、今は新型コロナや子どもの教育、高齢者の生活支援などが全国的な問題だ。地方

「化学物質の中毒だ。高知では、県の依頼でビルハウス内の消毒

ガスの調査を行ったこともある。毎年、中毒者が出ており、亡くなるケースもあった。ガスの正しい使い方や

「県民や関係団体にとって、より存在感のある大学にする。『あの先生はこんなことやってる』『こんな取り組みをやっている』と身近に感じてもらえるように。本学は訪問介護や糖尿病など、いろんな情報発信もしている。県立大学として、県民に『何でも教えてくれる』大学だと思ってもらえるようにしたい」

「専門の内容は。」「化学物質の中毒だ。高知では、県の依頼でビルハウス内の消毒